

鈴木信太郎記念館だより

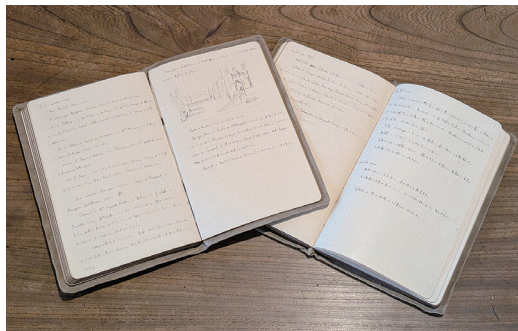
第13号

令和7年度コーナー展示「パリの信太郎 en 1925 - 100年前の留学事情 -」

当館では、本年4月から、令和7年度コーナー展示「パリの信太郎 en 1925 - 100年前の留学事情 -」を開催しています。今回の記念館だよりでは、この展示の内容をご紹介します。

1925年6月、東京帝国大学文学部の講師だった鈴木信太郎は、私費留学生としてフランスに渡り、その後約1年間パリに滞在しました。この信太郎のフランス留学から今年がちょうど100年の節目に当たることを記念して、本年度のコーナー展示では信太郎の留学生活に関する資料を展示することとしました。初公開となる自筆の日記や当時の様々な資料から、100年前のパリでの信太郎の留学生活を読み解く試みです。

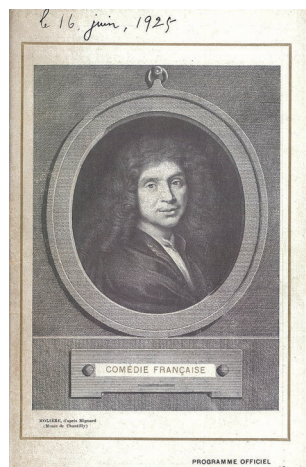
コーナーの冒頭では、信太郎がパリで使っていたと考えられるガイドブックや日記2冊を展示しています。ガイドブックには、バス路線図や地図、関心がある箇所^しに赤鉛筆で書き込みが残っており、信太郎が実際に使用していた様子が偲ばれます。日記には、演劇の感想、購入した貴重書^{きちょうしょ}、中世フランス語の勉強の進展、美術や音楽、娯楽、日々の雑感など、様々な内容が記され、イラストが描かれていることもあります。細かい文字^{きちょうめん}で几帳面^{ひんばん}に書かれ、頻繁にフランス語の単語が混じるところも信太郎らしく、当時のパリでの生活を知ることができる興味深い記録です。



鈴木信太郎の留学中の日記(1925-26)

当時、信太郎は、留学中の目標として、①演劇鑑賞、②貴重書の蒐集^{しゅうしゅう}、③中世フランス語の勉強、の3つを予め決めていたと言います。今回の展示はこの3つの項目に沿って構成しています。ここでは、これらの項目についての展示資料を一部ご紹介します。

信太郎は元々演劇好きでしたが、パリ滞在中は特に熱心に劇場に通っており、1年弱の間に270以上もの演目を鑑賞しています。1日のうちに午前中のマチネ、夜のソワレを両方観ることもありました。信太郎が観たすべての講演の内容は、日記に事細かに記録されています。実は、信太郎が日記で最も多く書いているのが演劇に関する内容で、俳優のセリフ回しや発声・身振りなどの演技、演出、音楽、舞台セット、脚本の良し悪しなどについて、独自の視点で批評しています。また、彼が観劇したほとんどの公演のパンプレットが当館に保管されていますが、数が多いため、今回の展示ではほんの一部をご紹介します。



コメディ・フランセーズ パンプレット
(1925年6月16日)



テアトル・ド・パリ パンプレット
(1926年1月29日)

きこうほん

稀覯本の愛好家だった信太郎にとって、留学の2つ目の目標は本の購入でした。

信太郎は、パリのシャンピオン古書店に足しげく通い、店主のエドゥアール・シャンピオン(1882-1938)と懇意になりました。信太郎が集めた書籍のほとんどは、帰国の際に送った船便の火事で焼失してしまいましたが、再び本を蒐集する際にはシャンピオンとの交友が大きな助けとなったのです。今回、シャンピオンが信太郎に送った手紙等も展示しています。また、シャンピオン古書店は、文学者やジャーナリストなど当時のパリの知識層の交流の場にもなっており、信太郎はこの場所で、研究対象だった象徴詩人ポール・ヴァレリーにも会っています。信太郎が、ヴァレリーの詩を勝手に翻訳して出版したことを告白すると、ヴァレリーはこれを許し、別れ際に信太郎を「私の翻訳者」と呼びます。信太郎はこの時の喜びを日記につづりました。信太郎がヴァレリーの詩を掲載した『仏蘭西近代象徴詩抄』も展示しています。

中世の詩人フランソワ・ヴィヨン(1431-?)に関心があった信太郎の3つ目の目標は、中世フランス語の習得でした。信太郎は、シャンピオンの伝手で中世フランス語学者リュシアン・フーレー(1873-1958)を紹介され、1週間に1度個人指導を受けました。信太郎は、フーレーを師として尊敬し、彼からの手紙や写真をガラスパネルに挟んで大事に保管していました。このパネルのほか、信太郎が当時中世フランス語の勉強に使用していたと考えられる書籍も公開しています。これらの書籍のうち1冊の扉ページに、信太郎は、この本を拾った方は左記住所に届けてください、お礼をします、というメッセージと共に、自宅の住所と地図を記しています。それほど信太郎にとってなくしたくない大切な本だったということでしょう。

信太郎は、渡仏から約1年後の1926年5月、父・政次郎の危篤を知らせる電報を受け、急遽シベリア鉄道で帰国しました。この時信太郎に送られた3通の電報に加え、信太郎が帰国時に使用したシベリア鉄道や南満州鉄道の時刻表なども今回初めて公開しています。

今回のコーナー展示では、ここでご紹介できなかった資料も多数展示しています。ぜひ実際に記念館に足をお運びいただき、100年前の信太郎の経験に思いを馳せていただければと思います。皆様のお越しをお待ちしています。

令和7年度展示記念講演会

上記でご紹介した令和7年度コーナー展示を記念して、本年9月、以下の概要のとおり、記念講演会を開催しました。この講演会の内容については、次回の記念館だよりでご報告する予定です。

・第1回講演 9月21日(日) 14:00-15:30

「鈴木信太郎記念館の書斎棟を考える～戦前期における鉄筋コンクリート造建築～」

講師：栢木まどか氏 東京理科大学工学部建築学科 准教授

・第2回講演 9月28日(日) 14:00-15:30

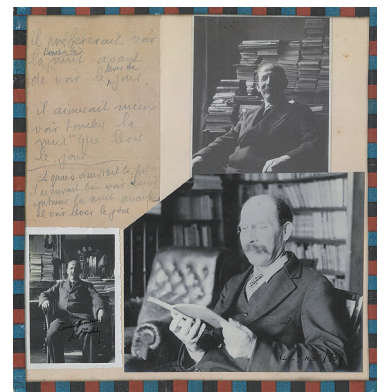
「信太郎が観たモリエール～日記に綴られた百年前の観劇体験～」

講師：小関武史氏 一橋大学大学院言語社会研究科 教授

(奥村 景子)



鈴木信太郎訳『仏蘭西近代象徴詩抄』、春陽堂、1924年



信太郎がフーレーの書簡・写真を保存したガラスパネル



渡仏前の信太郎(1925年、30歳)

鈴木信太郎記念館口演会

「和室で楽しむフランス文学～神田伊織の講談『レ・ミゼラブル』～」

鈴木信太郎記念館では、フランス文学者鈴木信太郎の旧宅の和室で、フランスの小説をもとにした日本の伝統話芸である講談を聞くというユニークな企画「和室で楽しむフランス文学～神田伊織の講談『レ・ミゼラブル』～」を連続で開催しております。講談師の神田伊織さんは、大学で仏文学を専攻し大学院修了後、2016年に神田香織に入門。2022年には二ツ目に昇進され、古典の復興とともに、独自の新作にも積極的に取り組み、現代に講談の魅力を広める活動を続けていらっしゃいます。2024年11月に実施された第1回の模様は前号にてご報告いたしましたが、本企画は、今後もヴィクトル・ユーゴーの歴史小説『レ・ミゼラブル』を題材に、伊織さんがオリジナルの講談として仕立てた新作を含む二席をご披露いただくかたちで、物語が完結するまで継続してまいります。

2025年3月8日(土)には、第2回を開催いたしました。今回から午前・午後の2部制(演目は同一)で実施し、より多くの皆さまにご参加いただけるようにいたしました。

この日の第一席の演目は「伊達家の鬼夫婦」。伊達政宗の家臣・井伊直人と、彼を支える賢妻お貞の物語が力強い語りで披露されました。夫婦による立ち回りの場面では、伊織さんの迫力ある語り口と、張り扇で釈台をたたく音が響き渡り、息をのむような展開に多くの観客が引き込まれ、会場は熱気に満ちていました。第二席の演目は『レ・ミゼラブル』より「ファンチヌの転落」。娘を育てるため苦難を背負うファンチヌの姿が、まるで目の前に浮かぶように語られ、臨場感あふれる新たな講談の世界に、大きな拍手が沸き起こりました。



第2回：「レ・ミゼラブル～ファンチヌの転落」より
会場の様子

さらに、2025年7月5日(土)には、第3回を開催いたしました。第一席の演目は「魚屋本多」。魚屋の宗太郎が祖父から託された水呑をきっかけに、父である大名・本多隼人正と再会し、宗太郎の息子・宗吉が侍となって家名を成すという物語です。宗太郎と隼人正のやり取りは、伊織さんのリズムカルな語り口によって軽妙に展開され、会場は笑いの渦に包まれました。第二席の演目は『レ・ミゼラブル』より「シャンマチュー事件」。ジャン・バルジャンが、自分と誤認されて裁かれようとしていた無実の男シャンマチューを救うため、葛藤の末に自らの正体を明かす場面が語られています。ジャン・バルジャンが良心の呵責に苛まれる様子を迫真の話芸で語り、最後は万雷の拍手が巻き起こりました。



第3回：「レ・ミゼラブル～シャンマチュー事件」より
高座で熱演する伊織さん

今後も『レ・ミゼラブル』の物語を読み進めながら、年に3回のペースで開催してまいります。途中回からのご参加でも十分にお楽しみいただける内容となっておりますので、皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

(徳力まもり)

鈴木家の住まい方ー七夕の竹伐りー

当館では、鈴木家で過去に行われていた季節の催しや住まい方に倣った様々な取り組みを行っています。今回は、7月に実施した七夕の催しについて、鈴木家で当時のエピソードを交えながらご紹介します。

鈴木家では昔、信太郎の長男・成文^{しげぶみ}が住んでいた頃、毎年七夕の前になると庭の竹を伐り、近所の人たちに配布していました。日々の暮らしの様子を綴った成文の著書『文文日記』の中には、毎年7月になるとこの「七夕の竹伐り」のエピソードが、時には手描きのスケッチも交えながら記されています¹。

毎年七月七日の七夕の前には庭の竹を伐って門に出すと近所の子供やおバサン達も喜んで持って行く。先日はニキロも離れた幼稚園が噂を聞いて貰いに来た。²

毎年この竹を心待ちにしている人達があるよだから続けたいが、私にしても不要の竹の間引きになって具合がいい。³



七夕の竹を配布する様子を描いた成文のスケッチ

成文はこの七夕の竹伐りを「毎年の恒例行事」と呼び、時には出張先からもわざわざ竹を伐るために帰宅するほど、この作業を大切にしていました。鈴木家の竹は、地域の人達から大変喜ばれたそうで、成文の日記からは地域との温かな交流の様子が窺えます⁴。庭の手入れの一環として行われていた七夕の竹伐りは、敷地の維持管理にとどまらず、季節に応じた住まい方の継承や地域社会との交流など、豊かな住文化を形成する上での多面的な役割を持っていました。

当館では、鈴木家で行われていたこの七夕の催し⁴を参考に、毎年7月になると庭の竹を用いた七夕飾りを玄関ホールに飾り、来館者の皆様に短冊へ願い事のご記入をいただいています。今年度は短冊を自由に装飾できるよう、シールなどの材料を用意し、オリジナルの短冊づくりをお楽しみいただきました。また、七夕の願い事には、鈴木信太郎がフランス文学者であったことにちなみ、フランス語の願い事の例文も用意するなど、来館者の皆様にフランス語に親しんでいただく機会を設けました。今後も当館では、フランス文学や鈴木家の住まい方に倣った様々な催しを予定しておりますので、ぜひ皆様ご参加ください。

(笹川 貴吏子)



玄関ホールに飾られた七夕飾り

【註】 1. 鈴木成文『文文日記——日々是好日Ⅳ』p.73 七月六日の記述。/2. 鈴木成文『文文日記——日々是好日Ⅲ』p.74 七月四日の記述。/3. 同左p.74 七月五日の記述。/4. 同左p.75 七月七日の記述によると、七夕の竹を近所に提供していた鈴木家ですが、鈴木家では特に竹に飾りつけなどは行っていなかったそうです。

【参考文献】 旧鈴木家住宅調査団『旧鈴木家住宅調査報告書』、旧鈴木家住宅調査団、2011年/鈴木成文『文文日記——日々是好日Ⅲ』、文文会KOBÉ、2005年/同『文文日記——日々是好日Ⅳ』、文文会KOBÉ、2006年

鈴木信太郎記念館だより 第13号

発行日 2025年9月30日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS